磐田市平和祈念式「平和への想い」

1945 年 8 月 6 日、一発の原子爆弾によって無差別に多くの命を奪い、生き残った人々の人生も変えました。74 年たった今でも、苦しみ続けている人がたくさんいます。そんな人たちのためにも、平和とは何か、そのためにはどうしたらよいかを考え、一人でも多くの人に伝え、自分の考えを深めてもらえれば幸いです。

僕は、広島平和記念資料館でたくさんの衝撃的な資料を見てきました。熱により溶けてゆがんだ自転車、ボロボロになった服やかばんなどが目に飛び込んできて、一目で原爆の恐ろしさを感じました。当時広島では、建物疎開という、空襲にあってしまったときに、火事を防ぐために、建物をこわし火が回らないようにしていたそうです。その建物疎開のために多くの学生が外で作業をしており、そこに原子爆弾「リトルボーイ」が投下されました。建物疎開によって亡くなった子どもたちが多かったそうです。また、原爆の力はすさまじく、一瞬で町を破壊し、多くの人々は、何が起きたのかも分からないまま苦しみながら息を引き取っていきました。生き残った人々も、火傷でパンパンにふくれ上がった顔、だらりと垂れ下がった皮膚、血みどろの体、変わり果てた姿で炎の中を逃げ惑っていたそうです。たった一つの爆弾で約 14 万の尊い命が失われました。とても信じがたいことですが、一つの原爆で一つの都市を一瞬で焼け野原にした原子爆弾は、この世にあってはいけないものだと思いました。しかし、この世界には、何千発と原爆を持っている国がいくつもあります。僕がこの話を聞いた時は、とても驚きました。一瞬にして 14 万の命を殺めてしまう力は存在してはいけないと思いましたし、戦争や原爆がいかに非人道的であるかを学ぶことができました。

広島平和記念式典では、広島市長と子ども代表の言葉がすごく心に残っています。広島市長は、「不寛容はそれ自体が暴力の一形態であり、真の民主的精神へ成長を妨げるものです。」というインドの独立に貢献したガンジーの言葉を紹介してくださいました。現状に背を向けることなく、一人一人が立場や主張を互いに認め合い、磨き合いながら、理想を目指し共に努力する「寛容」の心を持つべきだと思いました。そのためには、戦争や原爆を単なる過去のものだと捉えるのではなく、被爆者や平和を願う人々の声を受け止め、前進することが大切だと思いました。

子ども代表の市内小学六年生の二人は、「『悲惨な過去』を『悲惨な過去』で終わらせません。違いはたくさんあるけれど、大切なもの、大切な人を思う気持ちは同じです。また、お互いに思いを伝え合い、相手の立場になって考え、意志を持って学び続けたいです。」と言っていました。どれも、僕たちがこれか

ら生きていく世界をになう上でとても大切なことだと思います。自分の言葉や行動に責任を持ち、相手の気持ちになり、その意志を続けられれば、少しでも平和な世界へと近づいていくのではないかと思います。

しかし、こういった大きなことは、お金がかかったり、時間がかかったりするため、すぐには行動に移すことはできません。ですが、「ごめんね」や「ありがとう」の言葉で認め合い、許し合うこと、寄り添い、助け合うことはできるはずです。相手を知り、違いを理解しようと努力し、自分の周りを平和にすることも意識するだけですぐに変わると思います。

当時 15 歳の女性の言葉です。

「一人一人の人間の力は小さく弱くても、一人一人が平和を望むことで戦争を起こそうとする力を食い止めることができる。」

小さくささいなことですが、それをたくさんの人々ができるようになれば「平和」への道のりもそう長くはならないはずです。

僕は、学校の代表、市の代表として広島へ行ってきました。この貴重な体験をさせていただいたことに感謝し、「今、自分になにができるか」と考えたときにできる最大限のことを、最善の方法で活動したいと思います。僕に今できることは、自分が学んできたことを、学校や地域で伝え、平和や戦争について考えてもらうことです。そして「ごめんね」や「ありがとう」の言葉で認め合い、許し合い、寄り添い、助け合うことをし、まず、自分の周りを平和にしたいと思います。そして、世界が原爆の言葉ですら存在しなくなり、戦争や小さな争い事すらない、平和な世界だと言われるまでは、自分の考えを唱え続けたいと思います。

令和元年度　磐田市平和記念式典

磐田市立豊田中学校　三年　寺田　樹生